

旭

印刷を支え加工を活かす

工事本部 瓜破工場

鶴 順二



1997年(平成9年)1月、旭紙工株式会社に入社した工事本部瓜破工場の鶴順二さん。入社以来、中綴じ部門に所属し、23年間オペレーターとして活躍しています。

同僚たちから「細かいところまで気がつく」と丁寧な仕事ぶりに定評のある鶴さんに、仕事への思いや印象に残っている経験などについてお聞きしました。

——まずは、入社の際について教えてください。

他社でアルバイトをしていましたが、社内での配置替えをきっかけに退職。職を探しているとき、つなぎのつもりで家から近いところでアルバイトを始めました。それが旭紙工です。あるとき、当時常務だった橋野昌幸代表取締役社長に「正社員にならないか」と声をかけられ、社員

になることを決意しました。入った当時は若い人が少なく、うまくやっていたか不安でしたが、逆に少なかつたからこそ馴染みややすい部分もあり、それも入社を決め手となりました。

——現在の業務内容や仕事で工夫している点についてお聞かせください。

中綴じ部門においてオペレーターとして製本機のセットおよび検品作業を行っています。中綴じは丁合せれた本を揃えて針金を打ち、断裁するのですが、紙がしっかり揃っていないと不良品が出てしまいます。効率良く揃えるために帯鉄を加工したり、ブラシを使った部品を作ったりと、いろいろ工夫しています。

——仕事において、どのようなときにやりがいを感じますか。

紙が薄く誰もが機械をうまくセットできないときに、調子良くセットできると達成感があり、仕事にやりがいを感じます。

——これまでの失敗経験について教えてください。

入社して間もない頃、初めて中綴じの検品をしたときに天地がガタガタになっている状態の本を出してしまいました。当時は今ほど品質にうるさくなく寛容なところがあり、上長の判断でそのまま納品しましたが、もし現在同じような製品を出せば間違いなくクレームになっていたことでしょう。検品とは責任が重い仕事なのだと思います。それ以来、気を引き締めて検品作業を行っています。

——印象に残っている仕事はありますか。

10数年前、中日本印刷株式会社様から「花キューピット」の仕事依頼がありました。案件の内容は約

1300種類もあり、大変細かい作業が求められましたが、混入事故などトラブルなく無事に終わらせることができました。混入事故は中綴じだけではなく断裁・折加工でも起こり得ます。全部門で力を合わせてやりきったという感覚がありました。納品後、社長や先方が大変喜んでくださったことが印象深く今でも心に残っています。

——会社について「こうなれば良いな」という改善点があれば教えてください。

自分が入社した頃より、今はずいぶん工場も広くなりました。環境が良くなっても、連絡や指示がうまく行き渡らず手待ちになってしまうなど、無駄が生じる場合があります。そのような無駄をなくすためには、同じ部門のスタッフ同士はもちろんのこと、他部署とももっと密に連絡を取り合うなどの意識が必要だと思います。そのようなところが改善されれば、工程間の連携をスムーズに、皆がより効率的に作業を進められるようになるでしょう。

——最後に、今後の目標についてお聞かせください。

勤続23年とそれなりに経験を積んできましたが、この仕事は奥が深い。日々業務に携わっていると、まだ自分の知識不足を感じることもあります。今後は中綴じに関する他の機械、例えば貼り込みやボグラマなどを扱えるように、仕事を覚えていきたいと思っています。

さらなるスキルアップを目指す鶴さん。今後は部門内の人材教育の面においても活躍が期待されます。これからその前向きな姿勢で、中綴じ部門に必要な存在として、会社の成長を支えていくことでしょう。



企業情報

- ◆ 創立年：1983年1月
- ※ 創業：1963年
- ◆ 年商：15億円
- ◆ 従業員数：200人

※ 2018年12月実績

設備紹介

— 断裁機 —



私が紹介します！

工場本部 瓜破工場
断裁部門責任者
むとう えつお
武藤 悦朗さん

旭紙工で活躍する断裁機械。
加工作業の始まりを担う重要な機械と、携わるメンバーについて断裁部門責任者の武藤さんにお話を伺ってきました！

必要不可欠な
工程

Q. どのような機械なのでしょう？

紙を断裁する機械です。紙の加工のほとんどが断裁から始まると言っても過言ではありません。折加工よりも前に行われるもので、紙の加工をする上で必ず通る工程です。

瓜破には4台

Q. 工場には何台ありますか？

瓜破工場には4台あります。13年ほど前に導入されました。ちなみに、本社工場には3台あります。

資格は必要なし

Q. 使用する上で資格や免許は必要ですか？

資格も免許も必要ありません。現在、断裁部門に所属している6名の社員と、5名のタイの研修生が使用しています。

マンツーマンで
指導

Q. タイの実習生にはどのように仕事を教えていますか？

始めはほぼマンツーマンで指導します。基本的には見守ることを大事にしていますが、やはり危険な作業もあるので、横に立って危ないところや間違えそうなところを都度教える形です。徐々に作業がわかってきて見ていると安心できるようになったら、少しずつ独り立ちさせるようにしています。

取扱は要注意！

Q. 使用する上で注意しなければいけない点は？

断裁加工なので当然、刃物が機械から下りてきます。機械の構造上、基本的には人が刃物に当たらないようにできていますが、油断すると事故が起きるので気をつけなければなりません。また、断裁前に紙には高圧がかかるのですが、その圧は2トン3トンというレベルです。仮に、指を挟んでしまうと骨折では済まない怪我になります。事故を起こさないよう、非常に危険な機械を扱っているという意識は常に持っていなければなりません。

実力をつける！

Q. 瓜破工場として、今後の目標はありますか？

今は、とにかく実力をつけていくことです。特に、知識はまだまだ勉強してつけていくことができますし、仕事を回す上での考え方などももっと勉強していかなければいけないと感じています。全員で、その実力をもっと高い水準に持っていくことを目標としています。

